



気になるあいつ

わかぎゑふ

双葉社

奴はどうする？

13年も劇団に在籍していた、及川直紀という役者が退団した。大きな劇団だったら珍しいこともなんともないのだが、なんせ、我々小劇場の劇団は20〜30人くらいで構成されているので、長年やってきたメンバーが抜けるというのは大事件なのだ。

及川直紀（以後及ちゃんと書きますが）は千葉県出身で、関西人ではない。出会いは、彼がうちの劇団に臨時のスタッフとして、手伝いに来てくれたところから始まった。確か飲み会で一緒にいて

「及ちゃんも芝居に出たいねんて」

と誰かが言い、

「じゃあ、出たらええやん」

と答えて簡単に舞台に立った。

その後、みんなと仲良くなり、客演をしてもらっているうちに劇団員になった。元々は文学座の養成所出身だとかで、正当な芝居が売りの典型的な二枚目だったが、役者だけでは食えないので「タタキ」という大道具の仕事もしていた。

いつもスタッフさんに愛されていた人で、ある舞台の時などはカーテンコールの時に、「祝及川直紀！ 誕生日」という垂れ幕が突然下りてきたこともあった。及ちゃんの誕生日を知ってた大道具さんたちが、劇場に早く来て勝手に仕込んだのだ。

「なんだ？ なんだ？ 俺の誕生日だったのか？」

と照れながら大はしゃぎしていたのを覚えている。そんなに愛されていたのに…先日、「辞めたい」と言い出し、誰の説得にも応じずに去っ

て行ってしまった。

せめて、結婚とか、東京に戻るとか、うちの芝居よりもやりたい芝居があるとか、なにか人が聞いてスツキリする理由だったら良かったのだが、聞いても「自分を追い込みたい」などと、若い子が言いそうなことを言って取り付くシマもなかった。

「じゃあ、せめてこの一年、辞めることを前提に、自分の芝居を見つめ直す期間にしたら？」

とも言ってみたが、

「俺は必要とされているんだろうか？」

と答えられ、段々止めても無駄な感じが漂ってきて、私も手放してしまった。

人間はやる気がないとダメだ。うちの劇団で頑張るという、自分自身のモチベーションがないと、いくら在籍してても使えない。そういう主義の私は、やるからにはいつも今日以上でないといけな思っている。

その点では及ちゃんは、すでに今日を越えない気でいたので、退団を受諾した。

とても淋しい気分だ。長年一緒にやってきただけではなく、40代の役者が辞めて行ってしまうというのは、かなり広範囲の人たちに影響を及ぼすからだ。若手の劇団員も動揺は隠せないみたいだし：第一、次の舞台は彼の当たり役（写真の魔女みたいなおばさんの役です）だった。女装姿の及ちゃんのファンも多くいたのだから、せめてあの役だけでもやって辞めたらどうかとも思ったのだが：

最後に「東京に帰るのか？」と聞くと「いや、大阪にいるつもり」と言っていた。いったい何をするつもりなんだろうか？ 劇団に挨拶に来たときも「またいつかどこかで」なんて言っていたが、明確なビジョンはないようだった。

45歳になるおっさんが、次の手もなく、みんなが必死になって止めて

いるにも関わらず、出ていって何をするのだろうか？ 彼は、

「劇団と恋愛は似ている。甘えられる場所だと思っただけ、そこには居られない」

とも言っていたが、

「格好つけてるんじゃないよ！ ほんでこの先どないするねん？」

と聞きたかった。

はあ：劇団をやってればいろいろなアクシデントがある。大打撃から笑ってすませることまで。しかし今回ほど不可解な退団者はいなかった。奴は今後どうしていくつもりなのか？ 真意が知りたい。

【著者略歴】

わかぎあふ

1959年、大阪府生まれ。女優、エッセイスト。1986年より作家・中島らも氏とともに劇団「リリパット・アーミー」を主宰し、現在同劇団の進化形「リリパット・アーミーⅡ」の座長。1994年より演劇ユニット「ラックシステム」を旗揚げ。演劇制作会社「玉造小劇店」を運営し、女優のみならず、脚本、演出、メイクから衣装まで芝居全般にわたりその才能を発揮し続けるスーパーレディ。主な著書に『すみっここのすみっこ』『女体の神秘』『秘密の花園』『ぬくい女』『太りすぎの雲』『イブの抜け穴』など多数。
